



令和6年度 幼児教育研修（発達支援）
「子どものサインに気づく保育を目指して」
～子どもたちが困っていることを理解し、寄り添う保育～
日時：令和6年12月3日（火）15:00～17:00
会場：ギャラクシティ
講師：一般社団法人 キッズ・ピボット
代表理事 石原 陽子 氏

★ 保育園での相談と子どもの困っていること

保育園の巡回で保育者から受ける相談の例

- ・転びやすい
- ・姿勢が崩れやすい
- ・力の加減がわからず、お友達を押してしまう
- ・絵が描けない
- ・鉛筆の持ち方が拙劣
- ・食具の持ち方が拙劣
- ・協調運動が苦手
- ・不器用
- ・食事に関する相談



食具を上手く持てないので心配です

子どもはどのように困っているの？



➡ 保育者は指導の仕方を教えてもらいたい

まずは、子どもが困っていることの、背景を知る。
食具を上手に持たせることよりも、機能的なこと
なのか、理解力なのかなど、うまく持てないこと
の背景を知る。

★ 相談することのメリット、良いこと

- ・指導方法を教えてもらえる
- ・教えてもらった方法で指導することで、安心感がもてる
- ・保育の大変さを理解してもらえる
- ・大変さを理解してもらい、加配など職員配置について考慮してもらえる
- ・適切な時期に専門家による評価や支援につなげることができる
- ・子どもの困難さの背景を理解し、叱る、指摘する以外の方法を学ぶことができる
- ・子どもが困っている、感じていることに気づくことができる



★ 運動機能に関する相談

- ・行動面や姿勢・運動の問題
- ・集団の中で他の子どもとの比較
- ・標準といわれる指標との比較
- ・スムーズに課題や生活が進まず、保育者の困り感が高い



- ・運動面の困難さは、身体的発達や神経学的発達、認知、知的発達など、他の発達ラインにも影響している。行動だけでなく、難しさを持つ子どもの感情面、生理的な面にも配慮する
- ・行動面を強調しすぎると、子どもの体験的な面が隠されてしまう。社会的適応に焦点を当てすぎ深く体験している感情面の困難さを見逃してしまう

★ 身体的・神経学的発達

原始反射の統合と立ち直り反応の出現

原始反射は胎児期に出現し、脳幹に由来する不随意の運動反応

これらの運動反応は、脳が成熟するにつれ統合される。
立ち直り反応の出現によって、姿勢の安定、バランスの調整といった神経姿勢基盤が確立し、より高度な運動スキルが発達する。

運動のコントロールができることで、安心・安全の感覚が育つ

良好なバランス
姿勢調整
注意集中
社会参加
道具の使用
算数
読み書き
目と手の協調
自立した活動

★ 安全の感覚と見る、聞く、そして冷静になる能力



落ち着いて冷静でいることにより、赤ちゃんは人、物、光景、音、匂い、動きなどに興味を持ち、注意を払うことができる。



人やおもちゃ、周囲の環境などに関わるために必要な能力の発達には、**感覚処理の力**と**養育者による共同調節**はとても重要である。

幼児のための共同調節

- ・温もりと養育を提供する
- ・ニーズを予測し、合図に応える
- ・構造と一貫したルーチンを提供する
- ・身体的・精神的な安らぎを与える
- ・要求やストレスを減らすために環境を修正する など



就学前児童のための共同調節

- ・簡単な問題の解決策を教え、指導する
- ・心を落ち着かせるためのスペースや素材など、外部構造を提供する
- ・毅然とした態度で、かつ冷静に、明確で一貫性のある結果を与える など

★ 自己調節

- 様々な状況、環境に適応する力
- ストレスに対処する力
- 社会情動の発達の基礎

※社会情動スキルは、他者とつながるために不可欠なスキル
感情を管理し、健全な関係を築き、共感を感じるのに役立つ

自己調節に難しさがある乳児

行動統制と感覚運動の統合に難しさを示す

- | | |
|----------------|-----------|
| ①呼吸や嚥下などの生理的機能 | ⑤感情の組織化 |
| ②粗大運動 | ⑥行動の組織化 |
| ③微細運動 | ⑦睡眠・摂食・排泄 |
| ④注意の組織化 | ⑧言語と認知 |

タイプ I (過敏)

感覚刺激に過剰に反応したり、過敏である

こわがりて用心深い
否定的で挑戦的である

一日の終わりに困難を抱えることがある
ストレス状態にあたり、疲れている場合には、
より過敏な反応が引き起こされる

大人が主導権をにぎらない
子どもたちの大変さを理解し、温かく見守る



タイプ II (過小反応性)

感覚刺激に対する反応性が低い

ひきこもり、関わりが難しい
自己に没頭する

無気力ですぐに疲れ、引きこもってしまうように見える
運動的探索や感覚刺激、社会的働きかけに対する反応が乏しい

子どもからの合図に気づき、しっかりと反応する
子どもの非言語、言語的コミュニケーションに波長を
合わせる

タイプ III (運動の不器用さ、衝動性)

感覚入力への欲求をともなった行動コントロールの難しさを示す

高い活動性が示され、強い刺激を求める
運動によって発散する特徴が見られる

慎重さを欠いているように見え、体を接触させたり物を
壊したり、挑発されもしないのに殴るなどの行動に至る
ことがある



タイプ IV (その他)

運動あるいは感覚処理の難しさを示すが、
I～IIIのパターンに当てはまらない

叱られることが多く、自信を失いやすい
強く言わず、罰を与えず、しっかりと枠組みを決めて、
やっていい場所や時間を決める

研修生の報告書より

感覚統合の能力は2歳から7歳までの時期が最も高く、この時期に楽しい活動をたくさんすることやまわりとの関わり合いの中で能力をのばすこと、本人がやってみたいと思うことを行い、その成功体験によって感覚刺激を重ねることが大切であると学んだ。子どもの行動には意味がある。そのサインに気付く保育を目指し、寄りそう保育を心がけたい。

子どもが困っていることの背景や原因、できない事情を理解することを学び、自分自身にその考え方が欠けていたことに気が付いた。“こうしてほしい”という保育者の思いを伝えるのではなく、できない理由があるのか、できるけれどやりたくないのかを見極めていかなければならない。また、乳幼児期は共同調節が主で、大人との関わりが大切だと学んだ。抱っこや抱きしめるなど温もりを感じられる関わりを大切にしていきたい。